

春の彼岸によせて

平成二十九年三月 大乘寺 岡 光俊

この冬の早朝、気温は0度前後が三ヶ月以上続き、今まで以上に春の訪れを待ち遠しく感じます。

また、毎年のこととは言え、ご先祖さま方も桜の開花と共に皆さまの参拝を心待ちにされておられます。

昨年「春の彼岸によせて」より、墓参りの時には必ず手向ける櫛や櫛、卒塔婆のお話をさせて頂いてきましたが、今回は、ロウソクについてお伝えさせて頂きたいと思えます。

「長者の万灯より、貧者の一灯」という言葉があります。これは『賢愚経』^{あかり}に示されている「もろもろの燈明^{とうみょう}ことごとく滅したるも、ただこの燈のみひとり消えず」から生まれた言葉とされています。

お釈迦さまご在世の頃、難陀^{なんだ}という貧しい女人がおられました。彼女は毎日食べ物^こを乞い歩いて生活していました。あるとき祇園精舎^{ぎおんしやう}でお釈迦さまのご説法があり、国王や大臣、金持ちたちが、お釈迦さまに燈明、金品を供養することを知りました。私も燈明を供養することはできないものだろうかと思ひ、ある日、一日中歩いてようやく一銭を得ました。

それを持って油屋に行き、「燈明の油を一銭分ください」と言うと、油屋は難陀に尋ねます。「一銭分の油では用が足りないだろう。いったいこれをどうするのかね」。すると難陀は「私は貧しくて、他の人のようにお釈迦さまにいろいろ供養することができません。せめて、小さな燈明でも捧げようと思ひます」。

これを聞いた油屋はその心に感動し、油を二倍にして与えました。難陀は喜んで祇園精舎に行き、お釈迦さまに燈明を捧げながら「こんな小さな燈明にも、もしも功德があるのなら、来世には明るい智

慧を持って生まれ、一切衆生の苦しみを取り除くことができませんよ
うに」とつぶやいてその場を去りました。

説法が終わり、夜中を過ぎ、他のすべての燈明は全部消えてしまっ
たのに、この難陀の燈明だけが消えませんでした。

お釈迦さまは「かの女人の美しい心は、佛の心と等しい。ゆえに
大海の水をもつてしても、永久に消えることはないのです」。

『真心の灯は、永久にとり続けるものなのです』

この真心とは、「この次に生まれてきた時には、あらゆる衆生の
苦悩を救いたい」というもので、これを「大菩提心」と言い、お釈
迦さまの心ということです。自分の幸せよりもすべてのものを幸せ
にしたいという願いを起し、その願いを持ち続けることです。

生きる先を照らして下さる道標みちしるべを頂いた方は、迷いなく力強く生
きてゆくことができます。

燈明は命そのものをあらわします。また、お釈迦さまの教えを文
字にした経文をもあらわします。それらの象徴として燈明が使われ
てきたのです。

その他にも、絶やすことなく教えを後生に続けていく象徴として、
比叡山根本中堂の常燈明は、寛永十九年以来消えることなく伝教大
師最澄の教えを引き継がれている燈明として、良く知られています。

春の彼岸、本堂前にロウソクを寄進し、ご本尊さまに長年、ご先
祖さまをお守り下さっていることのお礼をし、そのうち墓参りの時
にロウソクを手向け、佛の教えを頂き、ご先祖さまに一步先を歩ん
で頂き、ご先祖さまが照らして下さる人生の路を真っ直ぐ歩ませて
頂きましょう。